

歌人としての忠度

歌に対する執念

危険を覚悟の帰京

この時源義仲の軍勢が京に迫っており、本隊と離れて帰京することには危険を伴った。

自分の生きた証として勅撰集に歌を残したいという思い

撰集のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に一首なりとも御恩をかつぶらうと存じて候ひしに、

その沙汰なく候ふ奈、ただ一身の嘆きと存する候ふ。

一首なりとも御恩をかつぶりて、草の陰にてもつれしと存じ候はば、遠き御守りこそ候はんずれ。

俊成卿が願いを聞き届けた後のすがすがしさ

薩摩守喜んで、今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にがはなをたのむはたひせ。

浮き世に思ひ置くこと候はず。さむはことま申して、「とて馬にうす乗り甲の緒を締め、西をさいてそ歩ませ給ふ。

歌に関する教養

俊成卿に長年教えを受けていた実績

年ころ申し承つてのち、おろかならぬ御こと思ひ参らせ候へども……。

日々の鍛錬

日ころよみ置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる巻き物を、……。

去り際の詩吟

前途ほど遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。「と高らかに口ずさみ給は、……。

『和漢朗詠集』大江朝綱・作「餞別」の一節。  
前途程遠し 思ひを雁山のゆふべの雲に馳す  
後会期遙かなり 纒を鴻臚の暁の涙に霑ほす  
再会が期しがたいことを詠んでいる。

「故郷の花」

・ さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

「さざなみや」……志賀にかかる枕詞。  
「志賀の都」……六六七年に天智帝によって開かれた大津京。  
大津京は壬申の乱（六七二年）後、廃都となった。

「ながら」……「昔と変わらぬ」という意味の「ながら」と、  
長等山（琵琶湖西岸の山）を掛けた「掛詞」。  
悠久の自然に対する人事の儂さを詠み込んだ内容。

俊成卿の評価

忠度に対する信頼

・ 俊成卿、「ぞることあるらん。その人ならば苦しがるまじ。入れ申せ。」とて、門を開けて対面あり。

忠度の懇願を快諾

・ 「かかる忘れ形見を給はり置き候ひぬるつは、ゆめゆめ疎略を存すまじつ候ふ。御疑ひあるへからず。さてまただ今の御渡りこそ、情けをすへれて深う、めはれまじ」と思ひ知りて、感涙おさへがたう候へ、「このたまへは、……」。

忠度を見送りながら涙をこぼす

・ 前途ほど遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。「と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残惜しつおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。」

忠度との約束を遵守する

・ そのうち、世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、……かの巻き物のうち、さりぬへき歌、いくらもありけれども、……故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、「よみ人知らず」と入れられける。

作者の評価

歌人としての忠度の才能を惜しむ

・ その身、朝敵となりてつは、子細に及ばすといひながら、つらめしかりしこともなり。

「つらめし」は、「口に出してもどうしようもないことを嘆く」  
気持ち。時代に翻弄された忠度の運命を仕方がないものと諦観しながらも、その才能が無名のまま失われたことに対するやりきれなさを述べている。